

# パトリック・ケースメントと人生からの学び

西村佐彩子

(京都教育大学)

## Patrick Casement and Learning from Life

Sayako Nishimura

**抄録**：本論文は、英国独立学派の精神分析家パトリック・ケースメントの臨床概念から「無意識の希望」と「他者の他者性」を取り上げて、それらの臨床概念がどのように生起されたのかについて論じた。ケースメントは、生い立ちや精神分析を受けた経験、また精神分析家Winnicottから受けた感銘といった、自らの人生と経験からの学びを通して、それらの臨床概念を発見していった。それと同時に、ケースメントは、理論や自身の経験を患者にそのまま当てはめるのではなく、患者の「無意識の希望」を信頼して「他者の他者性」を尊重しながら、患者自身が発見するプロセスについていくことで、新たに患者から学んでいこうとする姿勢がみられた。ケースメントの臨床実践には、与えられたもの（外的言語）ではなく、自分自身で見出すこと（内的言語）を大切にすることを一貫して窺えた。

**キーワード**：パトリック・ケースメント、精神分析、人生から学ぶ、無意識の希望、他者の他者性

**Key Word**：Patrick Casement, psychoanalysis, learning from life, unconscious hope, otherness of the other

これに対して彼女は応えました：「そんなに腹の立つことがあったかしら？」

この答が私を分析へと進ませました。

『人生から学ぶ』第1章より

## I. パトリック・ケースメントの人生と『人生から学ぶ』

本論文では、精神分析家パトリック・ケースメントとその臨床概念、特に「無意識の希望unconscious hope」と「他者の他者性otherness of the other」に焦点を当てて、それらの臨床概念の生起について、彼自身の人生からどのように着想されていたのかという視点から論じたい。

### 1. ケースメントについての印象

パトリック・ケースメント（1935～）は、英国独立学派に属する、英国精神分析協会の精神分析家・訓練分析家である。長く個人開業を営み、現在は引退している。ケースメントの経歴は多彩であり、ケンブリッジ大学で1年間人類学を学んでから、神学を修めた後に、保護観察官、ソーシャルワーカー、そして心理療法家を経て、精神分析家となった。彼の精神分析に関する「から学ぶLearning from/Learning along」と題する5編の専門書は、いずれも邦訳出版されている。ケースメントの人生からの学びと臨床に影響を与えた精神分析家としては、Winnicott, D. W. と Bion, W. が挙げられるが、特にWinnicottの影響が強く窺えるだろう。後に論じる無意識の希望は、論文「反社会的傾向」（Winnicott, 1956）への感銘と、彼自身の保護観察官やソーシャルワーカーの経験が重なり合い着想に至ったと考えられるが、さらにその背景には、彼自身の幼少期の体験からのつながりがあることも示唆されている（Casement, 2006）。

一方、ケースメントを実際を知る国内外の精神分析家は、彼について次のような印象を述べている。例えば、ケースメントの著書の邦訳に携わっている松木（2011）は、ケースメントの人柄について“気配りがとてもこ

まやかでやさしいところの人”であり、精神分析の訓練と実践を通して、ときに不可欠な確固とした姿勢も持つ“やさし過ぎない人になった”と評している。さらに“彼はかなり背が高く、眼鏡をかけている、どちらかというとやせ型の英国紳士ですが、硬さを感じさせない、うちとけやすい雰囲気を持ち主”（松木、1991）だともいう。また、英国精神分析協会の訓練分析家 Williams, P. は、『人生から学ぶ』（Casement, 2006）のまえがきに寄せて、次のように述べている。“ケースメントが自分自身について語る語り口には、いささかも懺悔や甘えがありません。彼の自己開示にみられる特徴は、その心温まる平凡さです”（Williams, 2006）。

これらの描写は、ケースメントの著作に登場する治療者・援助者としての彼の姿勢——例えば、「いいえ」と言うことを学ぶ（Casement, 2006 ; 4章）で示される——とも一致するだろう。

このように、ケースメントはそのやわらかさや温かさの内に、しんの通った意志を持つ人物であることが窺える。さらに、これから彼の人生史と臨床概念を読み解くことで、その奥に怒りを秘めている人であることを加えたい。その温和な風貌と異なり、著書に描かれる人生において、彼は幼少期においても、また彼の治療者たちにも、さらには潜在的には親に対して、結構怒っているのである。そして、その怒りを、破壊的なものとして終わらせるのではなく、そこに無意識のコミュニケーションという希望を見出しているのである。

## 2. 『患者から学ぶ』：「患者」の多義的な意味について

ケースメントは1985年に出版された最初の著書を『患者から学ぶ』と名付けたが、この「患者」には多義的な意味が含まれているといえるだろう。一つは文字通りこれまでケースメントが治療者・援助者として出会ってきた「患者」である。そして彼が、母親が母親になることを子どもから学ぶことと似ていると言及している文脈での（Casement, 2006 ; 1章）、子育て中の母親にとっての「子ども」でもある。さらには、患者としての「自分自身」のことも含まれた言葉であるように思われる。ケースメントは自分自身の人生史についても語った著書『人生から学ぶ』（Casement, 2006 ; 2章）において、精神分析の訓練課程に入る前に、自身がうつ病を患い精神科病院に入院した経験について開示している。そこでの体験と患者として抱いた怒りが、後に彼を患者から学ぶという着想に至らせた。そして彼は、訓練を目的にではなく、自分がそれを必要として、心理療法や精神分析に入ったことを、特別配当だと述べている。

すなわちケースメントは、精神科病棟のうつ病入院患者として受けた治療、それからクライアントとして受けた心理療法、さらには精神分析の訓練生として受けた精神分析（訓練分析）、それらのさまざまな水準で、「患者」であることを経験してきたのだ。これも多義的な意味で、ケースメントが「患者の立場に身を置く人」といえるだろう。自分自身の人生の経験から学ぶという体験こそがはじめにあり、そこから目の前の患者から学ぶという地点にたどり着き、いまのケースメントの臨床における姿勢があることが窺える。このことは、訓練分析・個人セラピーの経験及びスーパービジョンをその訓練の主軸とする精神分析の基本であることのように思われるが、本当の意味でそうあることの難しさを、ケースメントから学ぼうとすればするほど感じさせられることになる。そのことについても本論文では示していく。

## 3. 『道のりから学ぶ』における『人生から学ぶ』への言及

ケースメントが2018年に出版した Learning シリーズ最後の著書である『道のりから学ぶ』には、ケースメントが癌に罹患したときの闘病体験を綴ったエッセイ「癌と共に生きた時間」が収録されている（Casement, 2018 ; 18章）。ケースメントは77歳のとき（2012年）、生存率3%未満のステージ4まで進行したバーキットリンパ腫への集中的化学療法から奇跡的に生還した。彼が入院治療中、まさに死と隣り合わせであったそのとき、私は自分が何者なのかを知っているのかという問いに襲われた。そのさなか、妻のマーガレットに持ってきてもらい病室のベッドサイドテーブルに置いていた『人生から学ぶ』の書が、癌になる前の自分と接触して自分を取り戻す助けとなったことを、エッセイのなかで述べている。また、2016年に行われた Holland, Sからのインタビュー（Casement, 2018 ; 17章）においても、ケースメントは、自分にとって最も重要な著書は『人生から学ぶ』であると答えている。

2006年に出版された彼の4冊目の著書『人生から学ぶ』のなかで際立つのは、最初の第1章、第2章にケースメント自身の人生史——人生の方向感覚がまったく持てなかった頃から青年期の破綻を経て、精神分析との出会いまで——が収められていることだろう。ケースメント自身の経験からの学びと、これまでたどった臨床の軌跡からの学びが描かれているという点で、まさに「精神分析家である私」と「患者である私」のあいだにある本であるといえる。先述のWilliamsは本書のまえがきにおいて、分析家の人生を開示するのは本来侵襲的であるとされているが、ケースメントはこのジレンマに気づきながら率直さと読者への注意深い配慮を持ってこの課題に取り組んでいることに言及している（Williams, 2006）。そういった点から、とりわけケースメントの著作のなかでも貴重かつ異色であり、また本来であればこの本は「0冊目」としてカウントされるべきものといえるかもしれない。

そこで、この『人生から学ぶ』を主軸にこれを境として、それまでの3つの著作『患者から学ぶ』『さらに患者から学ぶ』『あやまちから学ぶ』を遡って振り返り、また、以降に記された『道のりから学ぶ』を読み解いていくことを試みる。

## Ⅱ. 『人生から学ぶ』から振り返るケースメントの臨床概念

ケースメントの代表的な臨床概念のなかから、特に彼の人生史とつながりが深いと考えられる「無意識の希望」と「他者の他者性」を取り上げ、その臨床的意味とこれらの概念がどのような背景を基盤にしているのかについてまず論じる。

### 1. 無意識の希望

ケースメントは、彼の著作において何度も繰り返し、修正感情体験（患者の過去の体験を治療者—患者関係で新たに体験し直させることで修正しようとする治療機序；Alexander, 1954）の不適切さと、それとは異なる「無意識の希望」のプロセスについて言及している（e. g. Casement, 1990；6章, 7章）。ケースメントは、患者のふるまいのなかには、その防衛や病理の中にさえ、満たされていないニーズを満たすために必要なものへの無意識の探求（または希望）の手がかりがあり、本質的には、この希望が健康なものであることを見出した（Casement, 1990；7章）。

この無意識の希望の着想は、Winnicottに端を発する。Winnicott（1956）は、剥奪された子どもたちの反社会的行動が望みhopeを表しており、“ものを盗む子どもは盗まれたものを探しているのではなく、彼や彼女が権利を持つところの母親を探し求めている”ということを理解することが、反社会的傾向を示す子どもの治療において重要であることを強調している。Winnicott（1956）の言葉を言い換えて、ケースメントは次のように述べている（Casement, 2006；1章）。“（ウィニコットは）子どもが安心や成長にとって、欠くことのできないものを奪われているとき、そしてあまりに長い間それが奪われてしまっているとき、希望hopeを抱いているなら、その子は盗みを通して、それを象徴的に探し出そうとするであろう、とのことを観察していた。ウィニコット以外の誰が、盗みの中にまでも、あの無意識の希望という衝動を認められたらだろうか？”そしてケースメントは、幼少期の体験、また臨床活動——保護観察官から精神分析家の仕事においてまで一貫して、「無意識の希望」の存在を認めていった。

Winnicottによる、患者が防衛として凍結した環境（養育者）の失敗状況が、後に治療者と患者のあいだにおいて解冻され再体験されるという示唆（Winnicott, 1954）をふまえながら、ケースメントは、治療関係において表れた患者の「無意識の希望」の取り扱いについて次のように考えを進めた。患者の激怒を扱えなかった親と違い、治療者がその転移関係のなかで再演された感情に持ちこたえる能力にこそ、よりよいものが見つけられる。これは、よりよい親であろうとすること（修正感情体験）とはまったく異なることなのである（Casement, 1990；7章）。

無意識の希望の着想に至る契機として遡ることができる、次のエピソードが『人生から学ぶ』には描かれている (Casement, 2006 ; 1 章)。三世代にわたる帝国海軍一家に生まれたパトリック・ケースメントは、8歳より寄宿学校に通ったが、そこでも手に負えない厄介な子どもであった。13歳の頃、寄宿学校の校長先生は短いお説教とともに、彼にこう言った。「私はあなたに賭けてみようと思います。私はあなたに監督生の責任を担ってもらおうと思っています。どうか私を失望させないで下さい」。それは、初めて彼を違った可能性を持つものとして見てくれる人がいるという驚きとともに、自身の厄介さを抑え込みその信頼に応えようという決心をパトリック少年に生じさせた「修正的」な体験であり、この体験は、このとき彼にとって紛れもなく真実であった。しかし後に、ケースメントは、この見解に見落とされているもの、つまりその厄介さのなかに、見過ごされてきた本質的なコミュニケーションである「無意識の希望」の存在を見出し、陰性感情に対峙し理解されることの必要性に気づいていった。実際、監督生となったパトリック少年は善行の模範となったが、彼が寄宿学校を卒業し監督生でなくなると、彼のなかの不器用な問題児が再び表面化したのだ。そして同時に、彼が校長先生への信頼と思ったものは、受け入れられるためには権威のある人にどのように表面的な従順さを示せばよいのかがわかったにすぎなかったことと、権威のもつ誘惑的な魅力に気づくようになった (Casement, 2006 ; 2 章)。

教義や理論といったものが、いかに私たちのこころを揺さぶりやすく、また疑いや不信を抱かせにくいものであるのかを、彼はその多感な思春期に身を持って体験したのだろうし、さらにはそれを自身の被分析体験のなかで見出したのだろう。『あやまちから学ぶ』の出版に際し、本来ケースメントは、副題の『精神分析と心理療法での教義 (ドグマ) を超えて』の方を前面に出したかったという (松木, 2004)。本書でケースメントは、“分析家のなかには…羨望というところからあまりにもやすく解釈したり…陰性治療反応と決めつけて容易に解釈する人たちがいます”と指摘し、患者の陰性の応答は、患者が治療者とのあいだでよい体験をしたときに、かつてよい経験が失われてきたことを切実に痛感させられることによる対照の痛み *pain of contrast* である可能性を見出している (Casement, 2002 ; 9 章)。そこには、一部のクライン派を想定したアンチテーゼとしての色合いが表れているだろう。このように、ケースメントの著書には、一貫して精神分析理論や教義を盲信することへの警鐘と慎重さがみられる。しかしそれだけではなく、同時にケースメント自身の体験も含めた、人間の本質への警鐘でもあることが窺える。

## 2. 他者の他者性

ケースメントの主要な臨床概念である「試みの同一化 *trial identification*」 (e. g. Casement, 1985 ; 1 章) に並び「他者の他者性」 (e. g. Casement, 2002 ; 9 章) がある。「試みの同一化」とは、患者の歴史性と感受性をふまえてセッションにおける患者との同一化を試みることであり、「他者の他者性」とは、その人のことはその人からしか学べないため、理論や以前の体験に基づいた理解をそのまま当てはめることはできないということである (Casement, 2018 ; 4 章)。ケースメントが自分自身の経験から学んでいるからこそ、とりわけ臨床場面においては、「他者の他者性」や「試みの同一化」という臨床概念を強調してきたとも考えられる。これらの概念には、あなたと私は別の存在であり、簡単に人の身になってみることはできないという視点が提示されている。ケースメントが心理療法家になるための訓練を受けていた 20 代の頃、精神科病院に入院した知人の娘を見舞った際に、彼女の描いた絵を見せたアートセラピストから、早期に母親からの情緒的な分離を体験した彼女が失われた臍の緒を再び見つけ出そうとしているのだと聞いたのだった。そのとき、私はその人ではないし、その人の経験は私のものとは全く異なるかもしれないという「他者の他者性」を最初に学んだ体験であったことを、彼は振り返り語っている (Casement, 2006 ; 2 章 ; Casement, 2018 ; 11 章)。ケースメントは、精神分析理論や枠組みだけではなく、治療者自身の人生のなかでの経験と発見を——それが本当に大切なものであればあるほど——そのまま患者にも当てはめてしまうことへの誘惑に、注意を促しているところがあるのではないだろうか。

ケースメントの代表症例に、火傷の患者 B 夫人がいる (e. g. Casement, 1985)。B 夫人は生後 11 か月のとき

にひどい火傷を負い、17ヶ月でその火傷の手術を受けたが、そのあいだ彼女の手を抱いていた母親は、その重さを受け止めきれずに気を失ってしまい、母親の両手が彼女の手から滑り落ちていくという恐怖を体験した。このことをめぐり、ケースメントは週5日の精神分析のなかで、一度はB夫人が不安に陥った際に彼の手を抱いてもよいと承諾したが、その後彼はそれを撤回した (Casement, 1985 ; 7章)。B夫人が、誰も——まさに母親が気絶してしまったようにケースメント自身も——彼女の憤怒や絶望を前に、生き残ることができないと無意識に確信していることを彼は実感していき、そして治療のもっと後になって、B夫人が火傷した11ヶ月のときに、感染の危険から彼女の命を守る必要性から、母親はB夫人を決してその手に抱くことができなかったことがわかったのだ。

『人生から学ぶ』は、彼の5編の著書のなかでB夫人の症例が唯一出てこない本である。しかし、このB夫人の体験は、本書 (Casement, 2006 ; 1章) で語られた、ケースメント自身がその幼少期に、彼があまりにも手に負えなかったために、1年に満たない期間、まさに11ヶ月以内に、ようやく慣れた乳母から新しい乳母へと、そして根源的には母親の手から乳母の手へと、手渡されてきた経験との重なりを思い起こさせる。彼にとって、連続性の中断は、突然に母親を失ってしまったときのように体験されていた。一方でまた、B夫人も、彼女が申し出た通りに週の5日目の金曜のセッションをやめるかどうかをめぐり、それが彼女には不当な中断であるように体験されていた (Casement, 1985 ; 5章)。

ケースメントが心理療法家としての訓練を始めてから、あるゲシュタルト療法のグループ研修に参加したとき、彼が最初に心理療法を受けた女性心理療法家と再会した。本論文の冒頭の引用は、彼女がそのグループで怒りや攻撃性を取り扱えないことを認めた、その直後に彼女と出くわしたケースメントが「なぜ私があなたに対して決して怒れなかったのかわかった」と言ったことへの彼女の返答だった (Casement, 2006 ; 1章)。ケースメントは、彼の母親や、幼少時に手に負えない彼と初めて7年間も一緒にいてくれた女性家庭教師、そして彼の最初の女性心理療法家を、誰の手にも負えないだろうと思われた彼の怒りから保護する必要があったのだ。『人生から学ぶ』の訳者山田にケースメントが次のように語ったエピソードが紹介されている。ケースメントは彼の訓練分析家 Stewart, H. との分析の一場面について、「私は怒るために分析家のあやまちを利用したのです」と笑って話し、治療者のあやまちによって引き起こされた怒りを治療者がそらさないことが重要であり、怒りが治療者に十分受け止められた後に、患者がその怒りは現実的なものだけではないと気づくようになったとき、初めて転移として取り扱われる必要性を語ったという (山田, 2009)。

ケースメント自身の、手に負えない厄介さというかたちで表れた「無意識の希望」が、自身が精神分析を受けるなかで彼の訓練分析家によって理解されていった経験や、そのなかで分離に持ちこたえた経験が、この症例のプロセスとB夫人の怒りにもちこたえることに果たした役割は大きいと思われる。しかし、それは、彼も明言しているように精神分析の規則や、当時彼がコンサルテーションを求めた Heimann, P. の助言に従ったわけではないことはもとより (Casement, 2002 ; 7章)、自らも同じような経験をワークスルーしてきた先輩の患者という立場から一歩先に立って患者であるB夫人を導こうとするようなことも決してなかった。彼は、その分析プロセスにおけるB夫人という個人の無意識のコミュニケーションに促されることで、患者自らが気づき発見していくことを通して、新たに彼女からその意義を学んでいる。あくまでも、患者のコミュニケーションと二人のあいだの分析プロセスについていく態度が窺えるのである。

### III. 症例におけるケースメントの臨床的示唆

#### 1. On being in touch

以上のように見ていくと、ケースメントの独自性のある臨床的発見が、彼自身の人生と決して無関係ではないということが見出される。『人生から学ぶ』の出版によって、そのことがより直接的・間接的に開示されたことをふまえて、ケースメントの症例から理解を深めるため、近視のAの症例を取り上げたい。本症例論文は初

出 (Casement, 1993) から25年後にタイトルを変えて『道のりから学ぶ』に収録されている (Casement, 2018; 1章)。また、『あやまちから学ぶ』の最終章「知っていることの彼方の知らないこと」においても症例Fとして症例の後半部分を中心に取り上げられている (Casement, 2002; 9章)。

本症例が収められている『道のりから学ぶ』第1章では、ケースメントが訓練から学んだ「精神分析の正しい手続きの重要性」と、患者から学んだ「患者に由来する分析プロセスと関わること」、その両方の側面があらゆる分析において大切であることが主張されている。しかし、両方と言いながらも、彼は患者との分析プロセスから学ぶことの意味に立ち戻り、探索を進め、考えを展開している。そのことは、本章のタイトルが初出題目“Psychoanalyse: Verfahren oder prozeß (Psychoanalysis: procedure or process? 精神分析: プロセスか手続きか?”から“On being in touch (ふれること)”に変更されているところにも表れているように思われる。

彼は、精神分析の手続きが優先されすぎると、患者の無意識から生じるプロセスである「無意識の希望」を覆い隠してしまう可能性を指摘している。さらに、精神分析の手続きから期待できることをはるかに超えるプロセスの意味——修正感情体験とは決して異なるもの——を提示した。患者の「無意識の希望」のプロセスを妨げなければ、治療者は患者やこのプロセスに巻き込まれることになる。ケースメントは自身の臨床経験から、母親 (治療者) が乳児 (患者) の苦痛の強烈さに持ちこたえられないとき、乳児は“さらに強力かつ頻繁に投影同一化を実行し続けざるを得なくされる” (Bion, 1967) 状態に取り残されるだけでなく、その苦痛に十分にふれることに持ちこたえ得る誰かを見つけれないことへの絶望感が増していくことを付け加えた。強烈な感情に直面したときの、早急すぎる解釈も、少なすぎる解釈も、治療者が患者の強烈な感情に持ちこたえ得ないのだと患者に経験される恐れがある。分析プロセスにおいて、治療者は、解釈のためだけではなく、以前にはそこにいることができなかつた人たちに対する患者の怒りや失望を直接体験するために、そこにいる必要がある。そして、それがどこからなぜ生じているのかを、やがては理解できる治療者も必要とされることになるのである。

## 2. 近視のAの症例

### (1) 症例概要

このことを、ケースメントは症例のなかに見出していった。Aは極度の近視でほとんど目が見えなかつたが、3歳半まで両親はそれに気づかず、彼の奇妙な行動は知的な遅れか脳の損傷のためであるかのように扱われていた。彼は、その視界の眺めだけではなく、見えない体験やそれに気づかれていないことが及ぼす影響を理解してくれる人もまた奪われたのだった。

Aが週5日の精神分析に辿りつくまでに数年を要したが、最初の出会いのときから精神分析プロセスが作動していたとケースメントは確信しており、ケースメントがこのプロセスに巻き込まれる準備のある誰かになるかもしれないという患者の「無意識の希望」によってそれが促された可能性を示唆している。

### (2) 週1日～3日のセッションの時期：無意識の希望

Aは息切れのたびに生じる死への不安を訴えた。ケースメントの提案に応じて、Aはしぶしぶ週2日のセッションに同意したが、彼は、ケースメントは自分こそが一番よくわかっていると思っており、Aが必要とするA自身の感覚を無視しているとみなしていた。ケースメントはAに自分の思い込みを押し付けていた両親のようになっていたのだった。このことを受けて、治療は週1日で開始された。開始から2年目、Aは息子の出産に立ち会ったとき、医師が自然呼吸へのプロセスを強要せず、臍の緒を切る前に母親に赤ん坊を抱かせたことに心動かされた。一方でAは出生時、首に巻きついた臍の緒をすぐに切られて、泣き声を出させるため医者に背中を叩かれたことがわかつたのだった。これらは必要な医療的手続きであった。治療者が精神的な考えにせきたてようとしているとAが体験していると感じたケースメントは、セッション頻度と結びつけ、治療者の考えを押し付けるのではなく、A自身のやり方を見出させることがAにとってどれほど大切なのかを伝えた。すると、Aは顔き静かに涙した。息切れによる死の恐怖と出生時の身体記憶のつながりが見出された後、息切れは

落ち着いていき、セッション頻度を増やすことをAは自ら求めた。

その数か月後、彼を背後から襲おうとする犬の夢を報告したAに、当時語られていた父親との競争関係に沿って去勢不安から解釈したケースメントを、彼は理論を強要していると蔑んだ。そのときどういうわけかケースメントに浮かんだイメージが彼の思考の流れを変えたのだ。どのような理論が当てはまるだろうかとAを叩いている医師のように治療者のことを体験しているというケースメントの解釈は、またAの情緒を動かし、それからまもなくAは週4日に分析を増やすことを求めた。

セッション頻度や理論に則った解釈という「正しい手続き」に依ることで行き詰まりに陥ることがある。そのときに治療者が患者の手がかり、つまり「無意識の希望」のプロセスについていく準備があるとき、患者は自分自身のペースで進ませてくれると感じ、分析は進展していくことがここでは示されている。

### (3) 週4日～5日のセッションの時期：他者の他者性

Aは16歳の頃、2つの言語を持っていたことに気づくようになった。幼少時Aがまだ見えなかったときに学んだ言葉は、動いたものが何なのかを探るために感触とにおいによって見分けるようになったプロセス全体を含む、自身の発見の感覚を言い表した、自分自身の「豊かな言葉」、すなわち自身によって発見された内的言語であった。しかし眼鏡が与えられたことで、彼は見えるようになったあらゆるものにもう一度名前をつけなければならなくなったのだ。それは彼にとって何の発見の感覚もない「空虚な言葉」、すなわち環境によって名づけられた外的言語であった。これまで誰にも伝えることのできなかった、この2つの言語の彼にとっての相当に異なる感覚を、ケースメントが理解し始めたと感じることができたことにAは深く感動した。

両親の使う言葉や、Aが自分の目で確かめなかった何かについての治療者の解釈は「空虚な言葉」であり、ケースメントは自分たちが見たように物事を見させようとして彼のぼやけた世界というリアリティを否定していた両親であった。

この名づけられた外的言語と発見された内的言語の関係は、修正感情体験という外から与えられる体験と無意識の希望という患者の内から生まれるプロセスの関係に重なるともいえるだろう。しかしこのことをケースメントは、修正感情体験や無意識の希望といった理論を外からあてはめるのではなく、Aとのあいだでは、A自身から生まれた「豊かな言葉」と「空虚な言葉」という言葉をもって語ろうとするのである。ここに、患者自身が自分の言葉を発見するプロセスを大切にすることをケースメントの姿勢が窺える。

## 3. 臨床におけるケースメントの姿勢

以上のような、与えられたものではなく自分が見出すことを大切にすることをケースメントのあり方のルーツを考えると、乳児が乳房を創造しようとしているちょうどその場所に母親はその乳房を置く（Winnicott, 1951）というWinnicottの発想が想起される。ケースメントは、Winnicottからどのように影響を受けたのだろうか。北山（2004）は、（筆者注：フロイディアンやクライニアンと呼称に対して）自らをウィニコッティアンと呼ぶ人に会ったことがないと言っている。そして、Winnicottが「私の技法はまねできない」という意味のことや、治療者が先取りするのではなく患者が「本当の答え」を「自分の言葉」で発見することに向けて導かなければならないと言っていたことも指摘している。実際、松木（1991）がケースメントにウィニコッティアンかを尋ねたとき彼はこう答えたという。「私は患者についてfollowいきます、私にできる限りの最善をつくして。そして、それがどんなところに私を連れていこうともです。Winnicottも同じことをしました。そうした意味では、私はWinnicottが見たところを見えています。しかし、私はWinnicottについていくではありません。そうしてしまうような間違いを誰でもがしてしまわないよう彼もきっと望んでいました」。

このことは先述のケースメントの姿や信念と重なり、彼はやはりWinnicottに感銘を受けていたことが窺える。しかし、ケースメント自身においても、Winnicottから与えられた「外的言語」を用いるのではなく、自分自身が患者とのあいだで見出した「内的言語」によって語ろうとする姿があり、何を語るか以上に、この姿勢こそが臨床において意義のあることなのだと考えさせられる。

ケースメントは、Aの症例を通して、治療者が分析プロセスを導かなければならないと考えているときよりも、思い切ってそのプロセスに導かれるとき、分析においてより多くのことが生じ得ることを示唆している(Casement, 2018 ; 1章)。ケースメントが、思い切ってそのプロセスに導かれることに委ねられたのは、彼自身のなかの「無意識の希望」への信頼があってこそものだろう。そして、ケースメント自身がその人生においても臨床においても、WinnicottやBionなど人の言葉を借りるのではなく、自分の言葉を発見して語ってきた経験は、Aが自分の言葉を発見していくプロセスと重なり、だからこそ、信頼してそのプロセスについていくことができたのだと考えられる。

#### IV. おわりに

このようにケースメントは、一貫して、「無意識の希望」の存在を信じ、自身のそして患者の内的言語を大切に、患者との関わりや臨床経験を歩んできた。彼の人生史を知ること、それが実を伴ったものであることを実感させる。

最後に付け加えて終わりたい。精神分析家の人生から学ぶことは多くあり、後世になって他の研究者が、Freud, S. や Klein, M. といった精神分析家の人生とその理論を考察することは珍しくはないだろう。しかし、ケースメントが生前に自身の著作のなかで自らが語ったというところこそ、その独自性と勇気を私たちは見るのである。

**付記** 本論文は、日本精神分析学会第65回大会(2019)の教育研修セミナー「パトリック・ケースメントの思索から学ぶ」における話題提供から、筆者の事例を除いた上で、一部加筆修正を行った。

#### 引用文献

- Alexander, F. (1954). Some quantitative aspects of psychoanalytic technique. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 2, 685-701.
- Bion, W. R. (1967). *Second Thoughts*. New York: Aronson.  
(ビオン, R. 松木邦裕(監訳) 中川慎一郎(訳) (2007). 再考: 精神病の精神分析論 金剛出版)
- Casement, P. (1985). *On earning from the patient*. London: Tavistock.  
(ケースメント, P. 松木邦裕(訳) (1991). 患者から学ぶ: ウィニコットとビオンの臨床応用 岩崎学術出版社)
- Casement, P. (1990). *Further learning from the patient: The analytic space and process*. London: Routledge.  
(ケースメント, P. 矢崎直人(訳) (1995). さらに患者から学ぶ: 分析空間と分析過程 岩崎学術出版社)
- Casement, P. (1993). Psychoanalyse: Verfahren oder prozeß. *Psyche*, 47(11), 1013-1026.
- Casement, P. (2002). *Learning from our mistakes: Beyond dogma in psychoanalysis and psychotherapy*. London: Brunner-Routledge.  
(ケースメント, P. 松木邦裕(監訳) 浅野元志・川野由子・日下紀子・永松優一(訳) (2004). あやまちから学ぶ: 精神分析と心理療法での教義を超えて 岩崎学術出版社)
- Casement, P. (2006). *Learning from life: Becoming a psychoanalyst*. London: Routledge.  
(ケースメント, P. 松木邦裕(監訳) 山田信(訳) (2009). 人生から学ぶ: ひとりの精神分析家になること 岩崎学術出版社)
- Casement, P. (2018). *Learning along the way: Further reflections on psychoanalysis and psychotherapy*. London: Routledge.



- (ケースメント, P. 上田勝久・大森智恵 (訳) (2021). 道のりから学ぶ: 精神分析と精神療法についてのさらなる思索 岩崎学術出版社)
- 北山 修 (2004). 改訂錯覚と脱錯覚: ウィニコットの臨床感覚 岩崎学術出版社
- 松木邦裕 (1991). 訳者あとがき 松木邦裕 (訳) 患者から学ぶ: ウィニコットとビオンの臨床応用 (pp. 257-264) 岩崎学術出版社
- 松木邦裕 (2004). 監訳者あとがき 松木邦裕 (監訳) あやまちから学ぶ: 精神分析と心理療法での教義を超えて (pp. 199-208) 岩崎学術出版社
- 松木邦裕 (2011). ケースメント, ビオンに学ぶ 精神分析研究, 55(1), 26-30.
- Williams, P. (2006). Foreword. In Casement, P., *Learning from life: Becoming a psychoanalyst*. (pp. ix-x) London: Routledge.
- (ケースメント, P. 松木邦裕 (監訳) 山田信 (訳) (2009). 人生から学ぶ: ひとりの精神分析家になること (pp. v-vi) 岩崎学術出版社)
- Winnicott, D. W. (1951). Transitional objects and transitional phenomena. Winnicott, D. W. (1958). *Collected Papers: Through paediatrics to psycho-analysis*. London: Tavistock.
- (北山修 (訳) (2005). 移行対象と移行現象 北山修 (監訳) 小児医学から精神分析へ: ウィニコット臨床論文集 (pp. 274-293) 岩崎学術出版社)
- Winnicott, D. W. (1954). Metapsychological and clinical aspects of regression within the psychoanalytic Set-up. Winnicott, D. W. (1958). *Collected Papers: Through paediatrics to psycho-analysis*. London: Tavistock.
- (岡野憲一郎 (訳) (2005). 精神分析的設定内での退行のメタサイコロジカルで臨床的な側面 北山修 (監訳) 小児医学から精神分析へ: ウィニコット臨床論文集 (pp. 335-357) 岩崎学術出版社)
- Winnicott, D. W. (1956). The antisocial tendency. *Collected Papers: Through paediatrics to psycho-analysis*. Winnicott, D. W. (1958). *Collected Papers: Through paediatrics to psycho-analysis*. London: Tavistock.
- (平野学 (訳) (2005). 反社会的傾向 北山修 (監訳) 小児医学から精神分析へ: ウィニコット臨床論文集 (pp. 373-385) 岩崎学術出版社)
- 山田 信 (2009). 訳者あとがき 松木邦裕 (監訳) 山田信 (訳) (2009). 人生から学ぶ: ひとりの精神分析家になること (pp. 249-255) 岩崎学術出版社